



自傷行為をする中学・高校生は友人との関わりをどのように捉えているか : 自傷経験者のブログを用いて

西, 恭平

吉田, 圭吾

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 18:43-52

(Issue Date)

2019-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011701>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011701>



自傷行為をする中学・高校生は、友人との関わりをどのように捉えているか —自傷経験者のブログを用いて—

How do junior and senior high school students who self-harm see relationships of friends
- Using blogs of self-harm students -

西 恭平* 吉田 圭吾**
Kyohei NISHI* Keigo YOSHIDA**

要約：

生徒の自傷経験率が約1割であることや自殺と親和性があることから、教育現場における自傷行為研究の重要性は明白である。また、青年期における研究では、友人の重要性が指摘されてきたが、自傷経験者と友人との関係に焦点を当てた研究はほとんど行われておらず、自傷経験者が友人と関わる際にどのような体験をし、その関係をどのように捉えてきたのかはまだ明らかにされていない。本研究では、自傷行為をする中学・高校生が、友人との関わりをどのように捉えているのかについて明らかにすることを目的とする。倫理的な配慮から、自傷経験のある中学・高校生5名のブログ記事を対象とし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)を用いて質的な分析を行った。分析の結果、16のカテゴリーと31の概念が生成され、教師などと同様に、友人にも【支え】としての役割がある一方で、【不信感】の増大といった危険性があることが浮かび上がった。また、〈羨望〉や〈嫉妬〉、〈ネット上の友人〉、他の友人の【自傷の影響】などが、友人関係において特徴的な概念として示された。

キーワード：自傷行為、中学・高校生、友人関係、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ブログ記事

I 問題と目的

i) 序論

中学生や高校生の自殺問題が多く取り上げられる現代において、教育現場における自殺予防教育が今日まで進められてきているが、その自殺予防において、生徒の自傷行為は無視できない問題であると考えられる。なぜなら、大学生の自殺願望と自傷経験に中程度の正の相関が見られること(杉岡・若林, 2012)や、精神科に通院した女性の自傷経験者のうち、22.4%がその後3年間で極めて致死性の高い手段で自殺企図に及んでおり、1名が自殺既遂により死亡したこと(松本・阿瀬川・伊丹・竹島, 2008)などから、自傷行為と自殺の親和性が明らかにされているからである。松本(2009)も、学校における自傷行為を踏まえた自殺予防教育が必要であると指摘している。ただ、自殺と関連のある行動として自傷行為を捉えずとも、自傷行為そのものが、精神的苦痛に耐えるための一時しのぎの解決策として行われる自己破壊的行動である(松本, 2009)ことから、自傷行為は取り上げられるべき重要な問題であると考えられる。さらに、日本における生徒の自傷行為の経験率は、中学・高校生のうち、男子7.5%、女子12.1%(Matsumoto & Imamura, 2008)であり、刃物で自分を切る自己切傷は中学生男子で8.3%、女子で9.0%(Izutsu, Shimotsu, & Matsumoto, 2006)、高校生男子で10.1%、

女子で15.6%(佐久間・高橋, 2010)と報告されている。つまり、中学・高校生の約1割が自傷経験者であることが明らかにされており、教育現場において自傷行為は身近な問題となっていることが伺える。これらのことから、自殺予防の観点からも、自己破壊的行動である自傷行為をする生徒が1割も存在するという観点からも、教育現場における自傷行為研究の重要性は明白である。

ii) 自傷行為の定義

自傷行為の定義はいまだ一貫したものはなく、現在も研究者によって定義は微妙に異なってくるが、本研究においては、自傷行為を以下のように定義する。

「自傷行為」とは、自殺以外の意図から、非致死性の予測をもって、故意に、そして直接的に、自分自身の身体に対して非致死的な損傷を加えることである(松本, 2009)。

iii) 自傷行為の研究史

自傷行為が初めて注目されるようになったのは、1960年代の欧米である。この時期に、自傷行為、特に自らの皮膚を刃物で切る自己切傷が多発し、自殺以外の目的で自身の手首切傷を繰り返す患者の一群の存在が報告されはじめた(Graff & Mallin, 1967; Pao, 1969)。その後、海外での自傷行為研究は盛んに行われるようになり、欧州7カ国における自傷経験者率は男子の約3~5%、女子の約10~17%

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程
** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

であること (Hawton, Rodham & Evans, 2006 松本・河西訳 2008) などが明らかにされており、また、自傷経験者への援助に関する研究も数多く行われてきた。他方、日本においては、1979年に西園・安岡(1979)により手首自傷症候群(wrist-cutting syndrome)が初めて紹介された。以後、日本でも自傷行為に関する研究が行われてきており、自傷経験者の性格特性として、援助希求能力が低いこと(松本, 2009)や自己否定が強いこと(浅野, 2016)、抑うつ傾向であること(大獄他, 2012)、希死念慮をもつ可能性が高いこと(神澤・中田・才野, 2016)などが明らかにされている。また、自傷行為そのものに関しても、伝染性を持つ可能性があること(松本, 2009)などが示唆されている。従って、これらの先行研究のように、主に自傷経験者本人に焦点を当てた研究が行われてきた。

iv) 教育分野における自傷行為研究

また、自傷行為が多発する青年期前期においては、自傷行為をする生徒たちにとって、主な生活の場であり、大きな役割を果たしているのが学校であるため、まだ少数ではあるものの、学校の対応に関する研究が行われてきている。例えば、自傷行為をする生徒への対応経験率は中学・高校の教師で83.2%(坂口, 2014)であり、中学の養護教諭で96.8%、高校の養護教諭で99.0%(松本・今村・勝又, 2009)であることなどが明らかにされている。

その中でも、坂口(2013)は自傷をする生徒たちの視点から、自傷経験者に対する学校での対応を検討し、その体験プロセスを明らかにしている。中学・高校生時に自傷行為を経験した者のブログ記事のうち、学校関連のものを分析対象とし、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に分析を行っている。これにより、自傷をする生徒が、先生からの対応に関して<サポートされたと感じるプロセス>と<冷たく見放されたと感じるプロセス>の大きく二つの体験プロセスを経ていることを明らかにした。さらに、一度<冷たく見放されたと感じるプロセス>に入ってしまうと、<サポートされたと感じるプロセス>に戻ることがほとんどないことも示された。しかし、日常的なサポートを繰り返し受けることで<サポートされたと感じるプロセス>に戻っていくルートがあることも明らかになった。これらによって明らかにされた、学校の先生の対応における自傷経験者の体験プロセスは、今後、学校において自傷をする生徒への対応を考える際や、すでに先生から距離を取ってしまった自傷経験者と関わっていく際の重要な知見であると考えられる。

v) 友人関係の重要性

ところで、青年期における研究では、友人の重要性が数多く指摘されてきた。例えば、友人とのコミュニケーションや友人からのサポートが、精神的健康を高める(福岡・橋本, 1995; 佐藤他, 2014)ことや、悩み事の相談相手として最も選ばれているのが友人である(永井・新井, 2006; 内閣府政策統括官(共生社会政策担当), 2016)ことなどが明らかにされている。落合・竹中(2004)も、青年期における友人関係が重要な意味を持っており、友人は欠かすことのできない存在であることを指摘している。そして、自傷をする生徒に対しても友人の重要性は示唆されるものであり、特に海外の研究においては、友人が自傷経験者にとって、最も自傷を打ち明けやすく、利用する可能性の高い援助者であること(Hawton, 2006)や、友人との関わりによってさらなる自傷を行うようになること(Walsh, 2005 松本・小林・山口訳 2007)など、友人が強い影響を与える身

近な存在であることが示唆されている。一方で、日本においても、友人や恋人との約束が自傷をやめるきっかけになることや、失恋や友人との喧嘩が自傷行為の直接の動機となること(大門, 2008)などが示されてきた。しかし、自傷経験者と友人との関係に焦点を当てた研究はほとんど行われておらず、自傷経験者が友人と関わる際にどのような体験をし、その関係をどのように捉えてきたのかはまだ明らかにされていない。しかし、これらを明らかにすることは、自傷経験者の援助を考える上で、大変意義のあることだと考えられる。

vi) 本研究の目的と意義

以上のことから、本研究では、自傷行為をする中学・高校生が、友人との関わりをどのように捉えているのかについて明らかにすることを目的とする。これにより、友人との関わりを、自傷をする生徒の視点から確認することができ、友人が、自傷経験者に対してどのような役割を果たすことができるのか、またどのような危険性を持つのかについて考察することができる。さらに、援助資源としての友人の価値を見出すことで、自傷経験者への支援の幅を広げることができる。また、これらを明らかにすることが、自傷経験者を支援する全ての人にとって、本人を理解するための手がかりとなることを期待したい。

II 方法

i) 分析対象

倫理的な配慮から、自傷経験のある中学・高校生に直接インタビューをすることは難しいと考えられる。そのため、本研究では、インタビューではなくウェブ日記・ウェブログ(以下ブログと略記)の記事を分析対象として採用する。ブログとは、World Wide Web上のウェブページのURLとともに覚え書きや論評などを加えて記録(ログ)しているウェブサイトの一種のことである。山下・三浦(2004)による調査では、ウェブ日記を書く理由の半数近くが日々の生活記録を自分のための覚書として残すためであるということを示している。また、川浦・山下・川上(1999)は、ウェブ日記に自分自身のことを書く行為が自己開示としての役割を果たしていると述べている。このように、自己表現の場として活用されているブログの中の記事は、彼らの「語り」の一種としてとらえることができると考えられる。加えて、日記的役割を担うブログにおいて、記事を書き込むタイミングは、その出来事が起こってからまだ日の浅い時点であることが多い。そのため、ブログ記事を用いた調査方法は、過去のことを思い出して話してもらうインタビューでの調査方法と比べ、実際には体験していないにもかかわらず体験したと錯覚してしまう誤想起が少なく、また時系列に沿って分析を行うことができると考えられる。これらのことから、本研究では自傷経験者のブログ記事を分析対象とする。

ii) 調査方法

日本最大級の無料ブログポータルサイトである「にほんブログ村」の「自傷・リストカット」カテゴリに登録されているブログのうち、中学・高校における友人とのやり取りや、友人に対する認識について、10記事以上記述されているものを採用した。また、調査時期は2017年9月から12月である。ブログを選定後、ブログに設置されているコメント欄または掲載されているメールアドレスを

用いて本人とコンタクトを取り、研究の目的と倫理的配慮に関する十分な説明を含んだ上で研究協力の依頼を行った。その上で同意を得た者のブログ記事のうち、友人関連のもののみを分析用のデータとした。なお、本研究における友人関連の記事とは、「研究協力者が友人と認識している者」とのエピソードや捉え方に関する記事のことであり、例えば、研究協力者が友人ではなくいじめの加害者として捉えている対象との記事などは除外した。これらによって最終的に得られたデータは、総文字数 344,712 文字であった。また、同意を得た者からは基本情報として以下のことを尋ねた。①性別②年齢③学年④自傷を始めた時期⑤自傷の場所⑥診断の有無と診断名⑦最後に自傷した日 これらの研究協力者 5 名の基本情報は Table1 に示す。さらに、本研究ではブログという特殊なデータを取り扱っているため、ブログの公開範囲、コメント欄の有無、個人メールの記載の有無、ブログの型も記載した。ブログの型とは、山下（2000）による、自己表現の仕方（直接的自己表現・間接的自己表現）と提示する情報の種類（情報重視・自己重視）の 2 つの次元から、個人のホームページを分類したものである。本研究の研究協力者のブログは、5 人共に、自分の心境を手記に表すといった直接的自己表現かつ、自分自身の性格や意見などについて提示しているといった自己重視であり、内面表出タイプであった。

iii) 倫理的配慮

研究協力の依頼の際に①この研究に至った経緯②研究の目的と方法③プライバシーの配慮について十分な説明を行った。記事は友人関連のもののみ使い、本研究以外の目的では使用されないこと、ブログ名およびブロガー名は伏せ、記事内の個人名や施設名などをすべてでたらしめにし、個人が特定されないよう配慮すること、希望すれば中止は自由に行えることなどを伝え、倫理的配慮とした。

iv) 分析方法

質的研究法の中でもデータに根ざした理論を生成することや、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用の説明と予測に優れていること、研究対象とする現象がプロセスの性格を持っている研究に適していることなどの特徴をもつ(木下, 2003)ことから、

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析を行う。また、分析テーマを「自傷経験者から見た友人の意味合いと関わり方」、分析焦点者を「自傷行為を行ったことのある中学・高校生」とした。C さんは専門学校 1 年生(休学中)であるが、まだ未成人であることと、中学校および高等学校生徒時の記述が多数見られたことから、その時期の記述に限定して C さんのブログ記事も分析対象とした。

また、M-GTA はデータのコーディングと深い解釈を同時に行う分析方法であり、分析者の思考の枠組みが分析結果に直接影響する(木下, 2003)。そのため、分析者の立場について明確にしておく必要がある。本研究の分析者は筆者であり、当時、大学で心理学を専攻し、臨床心理士指定大学院に進学予定の 4 年生であった。また、自身の経験の中で、自傷行為を行っている友人と関わる機会が高校から当時にかけて幾度かあった。

v) 分析過程

始めに、内容が豊富に語られていると判断した研究協力者 A さん、B さんのデータを用いて分析を進めた。その後、C さん、D さん、E さんと分析対象を順に増やしていった。分析作業は概念、定義、具体例のバリエーション、理論的メモの 4 つの欄から構成されている分析ワークシートを用いて行い、1 つの概念につき 1 枚のワークシートを対応させて分析を進める。分析ワークシートの一例は Table2 に示す。まず、データ全体を読みこんで内容を理解した後、分析テーマと分析焦点者の視点からデータを見ていき、関連すると考えられる箇所に着目する。そして、それを 1 つの具体例(バリエーション)とし、まだ未確認である他の具体例をも説明できる概念を立ち上げる。概念の立ち上げ後、他のデータからもこの概念に類似の具体例があればバリエーション欄に記録し、他の概念との比較検討や解釈過程などは随時理論的メモ欄に記入する。また、解釈が恣意的にならないように、類似例の確認だけでなく、対極例についても見ていき、理論メモに追加していく。全データから概念を生成した後、各概念間の関係からカテゴリーへの統合を行なった。他の概念と関連がない概念は削除し、新たな概念の可能性が見出された場合は以前の事例に立ち戻り、それを確認する作業を繰り返した。

Table1 研究協力者の基本情報

協力者	A	B	C	D	E
性別	女性	女性	女性	女性	女性
年齢	18	19	19	16	15
学年	高 3	高 4(4 年生高校)	専門 1(休学中)	高 2	中 3
自傷を始めた時期	中 2	小 5	中 1	中 2	中 1
自傷の場所	中学：誰もいない教室、トイレの裏等 現在：誰もいないリビングや寝室等	学校のトイレ、人気のない階段 自室、お風呂場	トイレ お風呂	自室	学校のトイレ 自室
診断名	受診経験なし	躁うつ・適応障害・人格障害	適応障害	受診経験なし	境界性人格障害
最後に 自傷した日	2017/10/25	2017/11/8	2017 年 11 月頃	2017/10/20	2017 年 10 月頃
分析対象データの文字数	75,502	104,990	114,971	15,375	33,874
ブログの 公開範囲	全記事一般公開	全記事一般公開	一部限定記事 (未使用)	全記事 一般公開	一部限定記事 (未使用)
コメント欄／個人メール	有／無	有／無	有／有	無／有	有／有
ブログの型	内面表出タイプ（自伝型）（山下, 2000）				

Table2 分析ワークシートの例

概念: 楽しめる場所
定義: 友人との空間が楽しめる場となっている。
バリエーション (具体例): ・今日は大親友のJと遊びました。カラオケとプリクラ撮りにいきました。楽しかったあ (A) ・Jが遊びに誘ってくれて2人で遊んだりして、その時だけは楽しかった (A) ・最近、仲良くなったLちゃんのおかげで楽しく過ごせた～★Lちゃんが笑わせてくれるから本当に楽しかった(^^) (A) ・昨日はホラー動画集のDVDをKちゃんと見ました。お久しぶりにKちゃんに会って楽しかった (A) ・今日は友達に誕生日祝ってもらったー!ケーキ食ったー!ジュース飲んだー!絵しりとりしたー!だるまさんが転んだしたー!楽しかったー!死ぬかと思ったー! (B) ・楽しかった!帰りはSにコンボタおごってもらった。同い年の男子におごってもらうなんて初めてでした。絵のことでいっぱい褒めてもらった(*^ω^*)それと、いっぱい笑った。 (B) ・今日は友達7人とカラオケに5時間行ってきました。2. 2. 3で別れたけどね。楽しかったー\ (・▽・)ノ (B) ・Vという毎日は本当に楽しかった (C) ・今日は大切なお友達と遊びに行きます会うの半年ぶりとか久しぶりすぎてちょっと緊張してる。まあ楽しいのは確定。楽しいな (C) ・午後はお友達と遊びに行きますカラオケ楽しみプリクラ楽しみ何より会えるのが楽しみ (C) ・Uと遊びに行ってきました!相変わらずとっても楽しかったです! (D) ・今日はWと一緒に遊びに行ってきた!ハプニングたくさんだったけど楽しかった(*´ω`*) (E)
理論的メモ:
「概念: 気分転換」と分裂
「概念: 居場所」のカテゴリー内概念? → 楽しめる空間となることで居場所となるプロセス的關係
対極例:
・Jと話しててもご飯食べてても本を読んでも何をやってても、誰と居ても、全然消えない孤独感 (A) ・友達と遊んでも一人になるだけで不安になって切りたくなる。 (B)

Ⅲ 結果

i) 概要

分析の結果、16 のカテゴリーと 31 の概念が生成された (Table3)。また、分析結果の概要をストーリーラインとして簡潔に文章化し、結果図 (Figure1) を作成した。なお、結果および考察において、具体例は「」, 概念名は ◊, カテゴリー名は 【】 で表している。

ii) ストーリーライン

まず、自傷経験者にとっての友人とは、付き合い始めた頃は、主に遊びやおしゃべりを共に楽しめる【仲間】という存在として捉えられている。そして、〈仲良くなろうとする気持ち〉、あるいは〈嫌われないための努力〉や、〈適度な距離〉を保つといった友人との【関係構築と維持】を行う中で、また、【受け入れられる体験】をする中で徐々に【仲間】としての存在だけでなく、心の【支え】としての存在となってくる。これは、〈活動するための支え〉や〈居場所〉としての役割だけでなく、自傷経験者が生きるための支えとしての役割も担っている。さらに、自傷経験者が心の【支え】となる存在として捉えた友人の、行動や言葉かけなどによって、自傷経験者に〈心情の前向きな変化〉が生じる、あるいは自身を〈奮い立たせる〉といった【前向きな転換】が起きたり、【自傷をやめようと思う】ようになったりする。このように、友人との関わりがポジティブな影響となっている一方で、友人と【距離を取る】べきか【迷い】が生じることも多い。これは、友人に〈わかってもらえない〉ことや友人の気持ちが〈わからない〉ことなどから【不信感】が募ったり、他者と比較し〈羨望〉や〈嫉妬〉といった【妬み】の感情に苛まれたりすることなどが影響している。特に友人への【妬み】は【自己嫌悪】に繋がる事が多く、友人にはその意思がなかったとしても自傷経験を遠ざける一因となってしまう危険性がある。また、友人と一緒にいるが仲間ではないという感覚である【疎外感】を感じることも、距離を取るルートへ影響していく。これは、自傷経験者にとっての〈居場所〉の大半をその友人が占めていた場合、もうどこにも【居場所がない】という感覚を引き起こすこともある。さらに、自分が自傷行為をしていることを話したり、見せたりする事による、友人への〈影響を気にする〉ことや、逆に自傷行為を行なっている友人と関わる中で、より自傷したくなるといった〈影響を受ける〉ことがあり、これらも自傷経験者が友人と【距離を取る】かの【迷い】の一因となる。このように、自傷経験者は様々な要因を天秤にかけながら【仲間】や【支え】として友人と関係が続けるか、【距離を取る】かを迷っていることがある。しかし、自傷経験者が友人の【裏切り】を強く感じた場合は、【迷い】を長引かせることなく【距離を取る】ことがある。そのうえ、友人と【距離を取る】ことのみにとどまらず、自傷経験者は友人以外の他人に対しても〈ふさぎこみ〉、だれも〈信じない〉といったように【心を閉ざす】ようになる。この【心を閉ざす】ことや【裏切り】と感じた経験は、人に対する【不信感】をより強固なものにするため、今後心を許してもいいと思える、信じてもいいと思える友人に出会ったときにも影響し、この友人は信じたいと思っているが【不信感】が抜けずうまく〈信じられない〉といった【迷い】が生じやすくなることも示唆された。この【迷い】から抜け出し、再び【支え】に戻るルートには、〈日常での嬉しいやり取り〉などの【受け入れられる体験】をすることが影響していた。

Ⅳ 考察

i) 先行研究 (坂口, 2013) との一致

結果より、友人は自傷経験者の大きな【支え】としての役割を持つ一方で、【不信感】などから友人と【距離を取る】こと、さらには友人以外の人物にも【心を閉ざす】ことなどの危険性が確認された。坂口 (2013) の研究では、自傷経験者にとって先生が存在が支えとなり、助けを求めることができたり、自傷を手放そうと思えるようになったりする一方で、自傷経験者が突き放されたと感じることで、先生に心を閉ざし、その結果自傷を促進したり、誰も信用しないようになったりすることを明らかにしている。そしてこの先生がもつ役割と危険性については、本研究における友人の役割や危険性ともおおむね一致する。これにより、学校という場において、本人より年齢が上であり、生徒を守る立場である先生などの大人のみが自傷経験者の支えとなれるのではなく、同年代であり同じ立場である友人であっても支えとなれることが示された。また、同時に友人の危険性も示された。

ii) “友人” に特徴的な概念

本研究は、「自傷行為者と友人との関係」に焦点をあてて調査・分析を行った。その結果、この“友人関係”を分析対象として取り上げたことにより見出せたと考えられる概念がいくつか浮かび上がった。ここではその概念について考察する。

・〈奮い立たせる〉

この概念は、友人の存在や言動によって“強くなりたい”“優しくなりたい”“一生懸命生きていこう”と自分自身を強く奮い立たせることを示している。これは、児童期から青年期にかけて特徴的な仲間関係であるチャムシップやピアグループが関わっていると考えられる。児童期から青年期への過渡期に、対人関係において規範とする対象は、親をはじめとする大人から同年齢を基本とした友人へと移行していく。Sullivan (1953) は、この時期の同性同年輩との親密な仲間関係をチャムシップと呼び、人間の精神発達上重要な意味をもつと述べている。また、内・外面とも異質性を認め、自立した個人として尊重しあう仲間集団はピアグループと呼ばれ、相違を明白にし、違いを乗り越え、自立した個人として共存し、互いの価値観や理想・将来の生き方を語り合う対等な関係であることを特徴としている (有倉, 2011)。これらのことから、教師—生徒関係ではなく、仲間意識を持ち、対等な立場として捉えている友人であるからこそ、その存在や言動が、自傷経験者の心を動かし、〈奮い立たせる〉ことや〈心情の前向きな変化〉につながったと考えられる。

・〈ネット上の友人〉

この概念はネット上の友人が支えとして捉えられている、あるいはネット上の友人の言動が、気付きや前向きな変化などのポジティブで大きな影響を与えているといったことを示している。本研究の協力者がブログを書いているということも影響していると考えられるが、現在の中学・高校生のネット利用率は 98.4% (総務省, 2016) であり、ブログを書いていないものであっても、〈ネット上の友人〉が支えとなっていることが想定される。しかし、大門 (2008) や佐野 (2016) といったように自傷行為者にインタビューをしている研究において、友人関係は取り扱っているが、ネット上の友人については言及していない。つまり、友人関係を聞く際に、インタビュー

Table3 生成されたカテゴリーと概念

カテゴリー	概念	定義	具体例
仲間	楽しめる場所	友人との空間が楽しめる場となっている。	今日は大親友のJと遊びました。カラオケとブリクラ撮りにいきました。楽しかったあ (A)
	気分転換	仲のいい友人と遊ぶことが気分転換やストレスの解消に役立っている。	気分転換に3年生でクラス一緒だった子と遊んでこようと思います (C)
関係構築と維持	仲良くなろうとする気持ち	友人と仲良くなろうと考えを巡らせたり、行動したりする。	クラスの皆と仲良くなろうと今更だけど頑張ってみる。(E)
	嫌われないための努力	嫌われないようにするために考えを巡らせたり、行動に移したりする。	みんなから嫌われないように努力してるのにな。(B)
	適度な距離	依存しすぎたり傷つけあわないように適度な距離を保とうとする。	2人との距離は私にとって丁度いい距離感… (A)
受け入れられる体験	日常での嬉しいやり取り	日常の中で、友人が自傷経験者本人のためにしてくれる言葉かけや行動に嬉しさを感じる。	体育祭の時お疲れさま、頑張ろうねって言ってくれて本当に嬉しかった (B)
	自傷の受け入れ	自傷行為をしている自分を受け入れてくれる。	「また切った」って言って頭無でられて、それは嬉しくってずっと一緒に居たいって (B)
支え	支えとなる存在	友人の存在が心の支えとなり、精神的な安定をもたらしてくれる。	あの子は私にとって1番の友達？親友？そんな言葉じゃ表せないほどの、それ以上の大切な存在。(A)
	活動するための支え	友人の存在や行動が、自傷経験者本人が活動する際の支えや、動力源になっている。	自分は友達に会いたいと言う学校が楽しくなってきたと言う (C)
	居場所	複数人の友人のグループまたは一人の友人が自分にとっての居場所となる。	私は自分の居場所を変えた。2人と居る方が楽しいと思った (A)
	ネット上の友人	インターネット上で知り合った友人とのやり取りや存在が、自傷経験者本人にポジティブな影響を与えている。	Fさんが励ましてくれたり、背中押してくれたりしてくれたおかげで踏み切れました。(A)
前向きな転換	心情の前向きな変化	友人の存在や言動によって、気づきや考え方の転換が起き、自傷経験者の心情に前向きな変化が生じる。	最近気づいたんです。Xと一緒に居るとすごく、自分も幸せなんです。(B)
	奮い立たせる	友の言葉や存在によって自分自身を奮い立たせる。	もっとXのために一生懸命生きていこうかと思います。自殺すればXには会えなくなっちゃう。(B)
自傷をやめようと思う	自傷をやめようと思う	自傷行為に対する友人の言動により、自傷を我慢しよう、あるいはやめようと思っている状態。	IはEをありのままのEを見てきているって。そう思うとリスクも我慢できる気がするんです (E)
迷い	迷い	友人から裏切られる恐怖や、傷つけてしまうかもしれないという不安から、友人と関係を続けるかどうか迷っている状態。	この先も付き合っている自信がない怖い不安なんです (D)
不信感	信じられない	友人に対する不信感。信じたいと思っていても信じられない状態。	人が信じれない。信用できない。2人のことも信じたいのに、信じれない。(A)
	わからない	相手の気持ちがわからず、不信感が募ったり、困惑したりする。	私はJの気持ちよくわからないんだよ… (A)
	わかってもらえない	自分のつらさは友人には理解されない、伝わらないという感覚。	一般人(という可哀想だけど)には自傷してたり病気で病んだりする人の理解は出来ない。って。(C)
	あきらめ	不信感からくる友人に対する諦めの気持ち。	何してもどうせ嫌われるしそれなら別に仲良くなろうと努力するだけ無駄 (E)
疎外感	疎外感	友人と居ても仲間外れになっていると感じ、疎外感を感じる。	友達と居ても必ず一人になる。(B)
自傷の影響	影響を気にする	自傷行為をしていることによる友人への影響を気にする。	私がリスクしてるせいでいつも心配かけたり、学校中に広まっちゃったり。(B)
	影響を受ける	自傷行為をしている友人から影響を受けて自傷行為が促進される。	その子が傷痕普通に見えるようにしててそれを見るたび切りたいかな (C)
妬み	嫉妬	愛する人の感情が他者に向けられることをおそれ、その人や、その人と仲のいい友人に対して抱く怒りや恨み、焦り。	P先生を奪わないでよお願いだから。私からP先生をとらないで大好きなP先生を。(A)
	羨望	自分にはない友人の優れた点を見て、羨んだり、気分が沈んだりする(二者関係)。	周りの子は確実に前に進んでる。未来に向かって歩いてる。それに比べて私は前に進めてもいない。(A)
自己嫌悪	嫉妬に対する嫌悪	嫉妬から生まれる友人への妬みや、その友人を嫌いになろうとしていること、対象を独り占めしようとしていることに対して、自己嫌悪している。	大切な人の行動にムカついて嫉妬したり。自分が嫌いの。(B)
	羨望に対する嫌悪	羨望から生まれる友人への妬みや、その友人を嫌いになろうとしていることに対して、自己嫌悪している。	素直に笑ってられる友達に囲まれるそんな貴方が羨ましいそんな貴方が少し憎い(↑私って最低) (A)
裏切り	裏切り	仲がいいと思っていた友人から裏切られたという感覚。	裏切られた結局Wも皆と一緒になんだ一番信頼していたのに (E)
距離を取る	距離を取る	傷つくことを恐れ、友人やその空間から過度に距離を取ろうとする。	傷つだけないって教室に行かないほうがいい (A)
心を閉ざす	ふさぎこみ	感情を抑制し、他人に対して心を閉ざそうとする。	自分1人で我慢するしか。心の奥底にしまっておけば誰も巻き込まずにすむんだ。(A)
	信じない	期待を裏切られ傷つくことを恐れ、他人を信用しないようになる。	ホントに信じません。人間なんて信じない。みんな裏切った。(C)
居場所がない	居場所がない	自分には居場所がないと感じる。	家にも、友達からも、時々見放される。どこにも居場所がない (B)

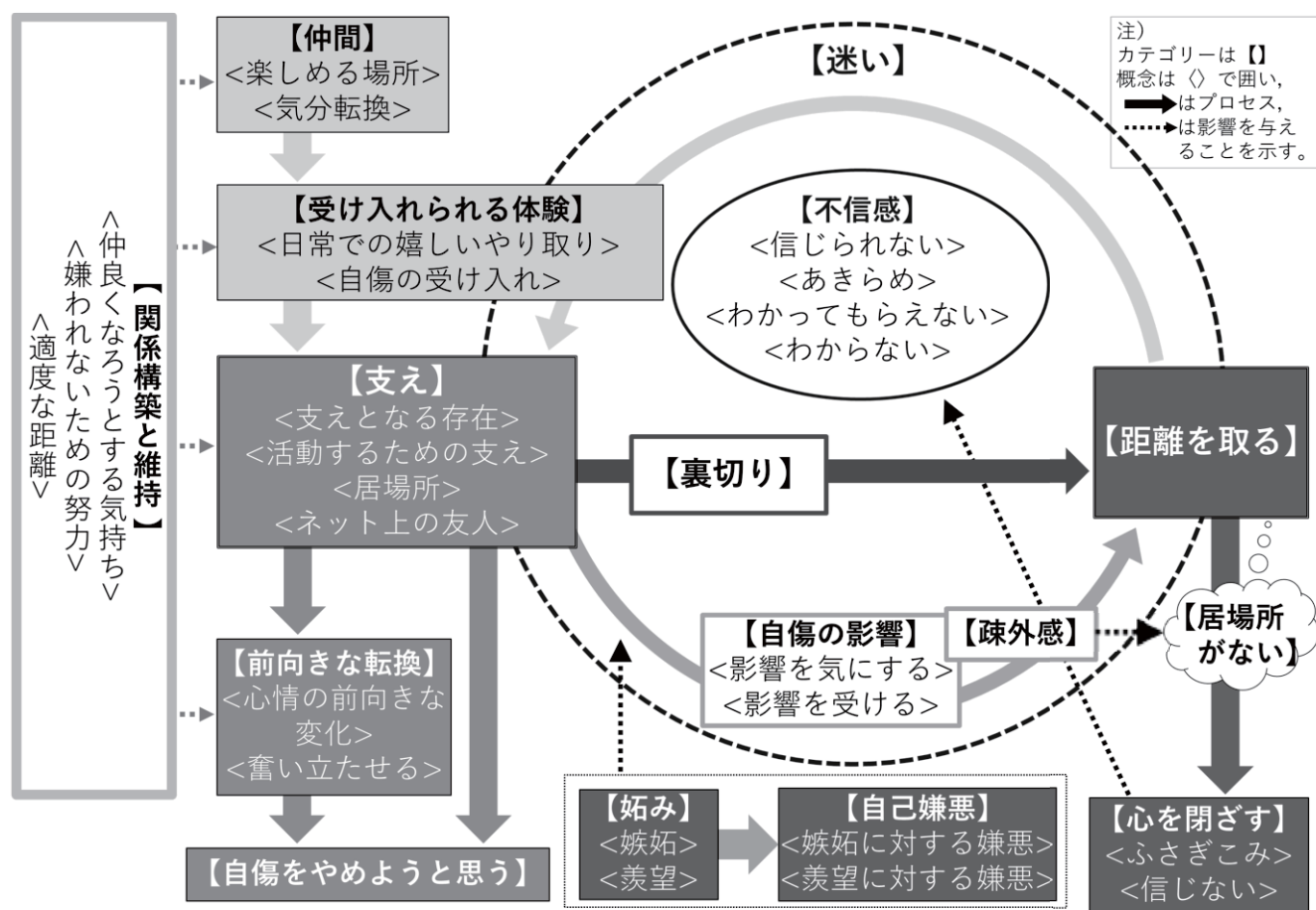


Figure1 自傷経験者から見た友人の意味合いと関わり方

をする側も、受ける側も、ネット上の友人を想定していない可能性が考えられる。そのため、この〈ネット上の友人〉という概念、及びその知見は、インタビューではなくブログ記事を分析対象として採用したために得られたものだと考えられる。このことから、今後はネット上の友人関係についても意識し、より詳しく調査していく必要があると考えられる。

・〈羨望〉

〈嫉妬〉や〈羨望〉と、それに伴う【自己嫌悪】は、その影響が大きいことは確認されなかったものの、友人と【距離を取る】プロセスへ影響していることが示唆された。ここで着目したい点は、〈嫉妬〉は本研究において先生が絡む事例があったが、〈羨望〉に関しては、友人に対してのみ向けられていたといった点である。これは、〈奮い立たせる〉の概念においても述べたように、今回対象とした前青年期の仲間関係における特徴、特にピアグループにおいて現れる、お互いを対等な関係として捉えた友人関係が影響したと考えることができる。つまり、自分より年上で知識や経験も多い大人よりも、自分と年齢が近く、対等な関係である友人であるがゆえに、相手が良い面を持っていることに、より一層うらやましく感じてしまっていると推測することができる。この〈羨望〉における分析ワークシート具体例を見ると、全対象者でその例が出ており、各対象者のエピソードの数も豊富であった。これらのことから、この〈羨望〉が友人に対してのみ向けられていたといったことは、本研究で「自傷行為者と友人との関係」を分析対象として取り上げたことにより見いだせた点の中でも、特に特徴的な点であると考えられる。また、【妬み】への【自己嫌悪】から、そんな妬みを持つ自分を誰かに見せたくない、見せたら嫌われると感じ、なかなか相談できないといった葛藤も確認された。加えて、【妬み】は友人が自傷経験者に対して悪意がなかったり、働きかけていない状況であっても発生するものであった。これらのことから、負の影響を与える概念の中でも【妬み】は対処が困難なものであると考えられるため、今後の研究においてそのプロセスを明らかにし、対応できるよう努めていくことが必要だと考えられる。

・【自傷の影響】

分析対象である自傷経験者のブログ記事の中で、同じように自傷をしている友人について書かれたエピソードはほとんど見られなかったが、主にCさんにおいて自傷をしている友人との特徴的な関わりがみられた。これらの関わりから、自傷をしている友人から〈影響を受ける〉といった概念が生成され、特に「その子が傷痕普通に見えるようにしててそれを見るたび切りたくなる(C)」 「私もその子とそういう話するようになって切りたい気持ちが出てきてカット癖が再発した。(C)」といった具体例からわかるように、自傷をする友人との関わりが分析対象者本人の自傷欲を掻き立てることがあるということが明らかになった。また、逆に自分が自傷行為をしていることによって友人への〈影響を気にする〉といった概念も生成された。

さらに、自傷の伝染性についても示唆される具体例があった。松本(2009)や大門(2008)は自傷行為には伝染性がある可能性を指摘しており、本研究においても、このような自傷行為の伝染性が示唆されたが、その詳しいプロセスまでは探れなかった。しかし、自分がどれだけ苦しんでいるかという指標として自傷を捉えることで、

自傷をしている友人よりも、自分の方が辛い思いをしていると示すために自傷行為を競うといった“自傷行為の競争”が友人間で発生することが確認され、自傷の伝染の要因の一つであると考えられる。
iii) 負のプロセスから正のプロセスに戻る要因

普段の挨拶や励ましなどから、誕生日のお祝いや旅行のお土産をくれることなど多岐にわたる〈日常での嬉しいやり取り〉を通して、受け入れられていると感じる体験をすることで、徐々に【不信感】を払拭し、友人を【支え】として捉えることができるようになるプロセスが確認された。坂口(2013)の研究では、先生たちが日常的なサポートをしてくれていると、自傷経験者が感じることで、〈冷たく見放されたと感じるプロセス〉から〈サポートされたと感じるプロセス〉に移行しうることを明らかにしている。よって、友人であつても先生であつても、自傷経験者と距離が離れそうになった際は、自傷経験者との日常的な関わりが二人の関係をつなぐために重要であることが明らかとなった。

iv) 友人の視点

本研究では自傷経験者の視点から調査したが、友人の視点から調査することもまた重要であると考えられる。そのため、最後に、友人の視点を想定し、本研究の結果を考察する。まず、本研究の協力者において、学校生活で自傷経験者の【支え】となっていた友人が、1〜3人程度であったことや、自傷行為そのものが、誰にでも気軽に話せる話題ではないことから、【支え】となる友人が自傷経験者の気持ちを1人で抱え込んでいる可能性が考えられる。松本(2009)が、援助者が1人で抱え込むことにより援助者自身が疲れ切ってしまうということがある為、自傷経験者への支援において複数の援助者であつたこと、あるいは援助チームを作ることが必要であると指摘しているように、友人が一人で抱えてしまうことは今後の友人関係におけるリスクを大きく高めてしまうと考えられる。そのため、実際に友人が一人で抱えていることがあるのか、あるとすればそれにどのような背景があるのかといったことを検討する必要がある。また、【裏切り】という体験が自傷経験者にとって大きな精神的ショックを受ける出来事であることが本研究で示されたが、この体験はあくまで裏切られたと感じたものであり、必ずしも友人が実際に裏切ったわけではなかった。これには、自傷行為に対する認識の違いが影響している可能性が考えられる。例えば、角丸・山本・井上(2005)の研究では、「自傷行為」から連想されることばのうち、実行した際に感じるであろう「感情」を書いた割合が自傷経験者は23.5%、非経験者は16.9%、「肯定的な意見」を書いた割合が自傷経験者で23.5%、非経験者で6.1%となっており、自傷経験の有無によって、自傷行為のイメージに大きな違いがあることが示されている。また、林(2008)も、自傷行為者に対して、誤った思い込みを周囲の人が抱きやすいことを指摘している。これらのように、自傷経験の有無によって、自傷行為や自傷経験者への捉え方に違いがあることが指摘されており、そのような捉え方の差が、裏切りだと思わせる一因になっている可能性が考えられる。また、松本・今村・勝又(2009)による調査では、養護教諭の65%が自傷する児童生徒にどう対応すべきかわからなかったと回答しており、心理的なケアに関してある程度の知識と経験を持つ養護教諭でもこのような感じ方をしているため、友人であつても、自傷経験者に対してどうしたらよいかかわらないと感じている者は多いと考えられる。そのため、どうしたら

いいかわからなくて反応が遅れたり、うまく気持ちを伝えられなかったりすることが、自傷経験者には裏切りとして映ってしまう可能性も示唆される。しかし、これらのことはあくまで先行研究と本研究から導き出した想定であり、実際に友人がどのように関わっているのかについては明らかにされていない。そのため、友人が自傷経験者との関わりをどのように捉えているのかについても検討していく必要があると考えられる。

このように、友人の視点から捉えようとしてみると、友人が自傷経験者への対応に様々に悩んでいることが予想された。そのため、今後自傷経験者との関わりについて友人の視点からも調査していくことで、より一層、友人が果たす役割と危険性について考察することができ、自傷経験者への援助につながると考えられる。

v) 本研究の限界と課題

本研究には以下のような限界と課題があることが指摘される。第一に、分析方法としてM-GTAを用いたこと、分析対象としたのがブログ記事であったことから、研究結果の適用される範囲がある程度限定されていると考えられる点である。M-GTAにおいては、分析対象としたデータのみを用いて解釈するため、その結果は使用したデータの範囲内に限定されていると考える。したがって、本研究の分析結果は、分析焦点者とした「自傷行為を行ったことのある中学・高校生」に限定される。しかし、友人関係は学生時代だけではなく、生涯を通して存在するものであり、自傷経験者と友人との関わりを把握していくためには、さらに年齢層を広げて調査していく必要があると考えられる。また、分析対象としてブログ記事を採用しているため、日常の出来事や心情をある程度言語化できる者・場面に限られている。さらに、今回用いたブログ記事は、その全てが一般公開の記事であったため、不特定多数の読者が閲覧可能であり、1対1の状況でプライバシーが守られているといったインタビューでの調査方法に比べて、分析対象者の心の深層にまで迫った語りが表れにくく、得られる情報が限られているという可能性が考えられる。これに加え、ブログを書くことの効用として、自分の問題や感情を整理できること、不満や葛藤などを発散できること、自分に共感してくれる他者と出会い親しくなれることなど(山下・川浦・川上・三浦, 2005)が明らかにされており、そのような効用が分析結果にも影響を与えている可能性も考えられる。以上のことから、今後は研究協力者の範囲を広げ、また分析対象を慎重に吟味しながら、研究を進めていく必要があると考えられる。

第二に、本研究では十分な理論的サンプリングを行えているとは言いきれない点である。自傷行為という倫理上取り扱いにくい問題であり、気軽に協力していただける事象でないことや、ブログを書いており、外部と連絡が取れる中学・高校生という限定された対象者であったことなどから、研究協力者を集めること自体が容易ではなく、理論的飽和となるまでのサンプリングには至らなかった。そのため、対象者の選定に気を付けながらも協力者の数を増やし、より理論的サンプリングを行っていくことが必要であると考えられる。

第三に、本研究では友人関係という2者以上の関わりを、自傷経験者の視点のみから検討したため、一義的な解釈になっていると考えられる点である。考察でもふれたように、本来であれば自傷経験者との関わりについて友人の視点からも調査していくことが必要であるが、本研究では扱っておらず、先行研究もまだ十分になされて

いない。そのため、自傷経験者と関わる友人の、体験プロセスと捉え方について明らかにしていくことが今後の研究課題であると考えられる。

V 引用文献

- 有倉 巳幸 (2011). 中学生の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 63, 29-41.
- 浅野 瑞穂 (2016). Cutting への親和性尺度の作成 立教大学臨床心理学研究, 10, 15-27.
- 大門 真理子 (2008). 高校生における自傷行為の動機と維持に関する心理過程 兵庫教育大学大学院学位論文 (未公開)
- Graff, H., Mallin, K.R. (1967). The syndrome of the wrist cutter. *American Journal of Psychiatry*, 146, 789-790.
- 林 直樹 (2008). リストカット・自傷行為のことがよくわかる本 講談社
- Hawton, K., Rodham, K., Evans, E. (2006). *By Their Own Young Hand : Deliberate Self harm and Suicidal Ideas in Adolescents*, Jessica Kingsley Publisher, London. (ホートン, K., ロドハム, K., & エヴァンズ, E. 松本 俊彦, 河西 千秋 (監訳) (2008). 自傷と自殺——思春期における予防と介入の手引き—— 金剛出版)
- 福岡 欣治・橋本 幸 (1995). 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43 (2), 185-193.
- Izutsu, T., Shimotsu, S., Matsumoto, T. et al. (2006). Deliberate self-harm and childhood histories of Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD) in junior high school students. *European Child and Adolescent Psychiatry*, 14, 1-5.
- 角丸 歩・山本 太郎・井上 健 (2005). 大学生の自殺・自傷行為に対する意識 臨床教育心理学研究, 31 (1), 69-76.
- 神澤 創・中田 玲奈・才野 雄大 (2016). 若年者の自傷行為と精神的健康に関する研究 帝塚山大学心理学部紀要, 5, 57-63.
- 川浦 康至・山下 清美・川上 善郎 (1999). 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか 社会心理学研究, 14, 133-143
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い—— 弘文堂
- 松本 俊彦・阿瀬川 孝治・伊丹 昭・竹島 正 (2008). 自己切傷患者における致死的な「故意に自分を傷つける行為」のリスク要因——3年間の追跡調査—— 精神神経学雑誌, 110, 475-487.
- Matsumoto, T., Imamura, F. (2008). Self-injury in Japanese junior and senior high-school students: Prevalence and association with substance use. *Psychiatry and Clinical Neuroscience* 62, 123-125.
- 松本 俊彦・今村 扶美・勝又 陽太郎 (2009). 児童・生徒の自傷行為に対応する養護教諭が抱える困難について——養護教諭研修会におけるアンケート調査から—— 精神医学, 51 (8), 791-799.
- 松本 俊彦 (2009). 自傷行為の理解と援助「故意に自分の健康を害する」症候群 日本評論社

- 永井 智・新井 邦二郎 (2006). 中学生の相談行動と性別・学年・相談相手との関連の検討 日本教育心理学総会発表論文集, 48 (0), 723.
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当) (2016). 若者の生活に関する調査報告書 内閣府 Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf/kekka.pdf> (2018/1/29)
- 西園 昌久・安岡 誉 (1979). 手首自傷症候群 臨床精神医学, 8, 1309-1315.
- 大獄 さと子・伊藤 大幸・染木 史緒・野田 航・林 陽子・中島 俊思・高柳 伸哉・瀬野 由衣・岡田 涼・辻井 正次 (2012). 一般中学生における自傷行為の経験および頻度と抑うつとの関連——単一市内全校調査に基づく検討—— 精神医学, 54 (7), 673-680.
- 落合 良行・竹中 一平 (2004). 青年期の友人関係研究の展望——1985年以降の研究を対象として—— 筑波大学心理学研究, 28, 55-67.
- Pao, P.E. (1996). The syndrome of delicate self-cutting. *British Journal of Medical Psychology*, 42, 195-206.
- 坂口 由佳 (2013). 自傷行為をする生徒たちに対して学校はどのような対応をしているのか——自傷行為経験者のブログから—— 教育心理学研究, 61 (3), 290-310.
- 坂口 由佳 (2014). 自傷行為に関する認識とその対応に伴う感情——教員への質問紙調査から—— 日本教育心理学総会発表論文集, 56 (0), 640.
- 佐久間 浩美・高橋 浩之 (2010). 都市部の高校生における健康行動及び危険行動の要因——自己管理スキル, ストレス反応及び学校生活満足度との関連—— 学校保健研究, 52(4) 284-294.
- 佐野和規 (2016). 学校教育における自傷行為への心理的対応方法に関する研究 兵庫教育大学大学院博士論文 (未刊行)
- 佐藤 進・鈴木 貴士・川尻 達也・山口 真史・清水 節・高畑 俊成・山田 裕憲・金 永鐘 (2014). 工科系大学生の生活習慣とメンタルヘルスの関係 工科教育研究, 21, 147-156.
- 総務省 (2016). 平成 28 年通信利用動向調査の結果 情報通信統計 データベース Retrieved from http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/170608_1.pdf (2018/1/29)
- 杉岡 正典・若林 紀乃 (2012). 大学生を対象とした自殺予防教育に関する基礎的研究 広島文化学園大学学芸学部紀要, 2, 9-15
- Sullivan, H. S. (1953). The interpersonal theory of psychiatry. (サリヴァン, H. S. 中井 久夫・宮崎 隆吉・高木 敬三・鎌 幹八郎 (共訳) (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- Walsh, B. W. (2005). *Treating Self-Injury: A Practical Guide*. Guilford Press. (ウォルシュ, B.W. 松本 俊彦・山口 亜希子・小林 桜児 (訳) (2007). 自傷行為治療ガイド 金剛出版)
- 山下 清美 (2000). インターネットは自分や他人との関係を振り返る場になり得るか 読売ADレポート ojo 3月5日, 22-24.
- 山下 清美・三浦 麻子 (2004). 人はなぜウェブ日記・ウェブログを書き続けるのか (2) 日本社会心理学第 45 回大会論文集, 694-695.
- 山下 清美・川浦 康至・川上 善郎・三浦 麻子 (2005). ウェブログの心理学 NTT 出版

付記

本論文は 2017 年度に神戸大学へ提出した卒業論文を加筆修正したものである。また、第 40 回国際学校心理学会東京大会において報告したものである。